
ロフト幻想

もとじろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロフト幻想

【Nコード】

N6769B

【作者名】

もとじろう

【あらすじ】

目が覚めたとき、違和感や物悲しさに襲われたときはありませんか？そんなものをばんやりと書いたものです。

目が覚めて、痺れた様にあいまいな感覚の体を起こした。眠りについたときは太陽が南中して間もなかったのに、もう部屋には夜の帳が下り始め、カーテンの裏に覗く外のほうがぼんやりと明るく見えた。部屋の隅に置かれた水槽は青に近い色を湛えて、その水面は波立っていた。

私はそうしてロフトから身を起こして窓を眺めていたが、不意に散らかった部屋に意識が集中し、じわりと涙が目のにじむのを感じた。白い壁。きみどり色のカーテン。水槽から聞こえるエアポンプの規則的な音。ためた洗濯物をまとめて洗って干した、不細工な物干し台と、のばしたままの延長コード。テーブルの上に出しっぱなしのコップ。読みかけの本が数冊。床に脱ぎ散らかした衣服。その散らかった要因は、ただ単に自分が好きなように、楽なようにしただけ。その様子を見るだけで何故涙が出るのだろうか。一緒に眠った恋人が目覚めたら隣にいなかったわけでもない。宴の後の人寂しさでもない。じゃあどうしてなんだろう。誰にも気を遣わなくてもいい、誰も片付けてくれない、裏を返せば自分が一人であると言う証拠だからなのか。ただ一日が終わっていく夕方の気に当てられたのか。

（要するにさびしい）

部屋はほぼ無音だった。聞こえる物音はエアポンプの鈍い作動音と空気の破裂音だけ。外からは何の音も、声も聞こえない。ああ、人と話さずに一日が終わっていく。もしかしたら、自分は寝ている前に声を失っているのかもしれない。そこまで考えて、私はただ声を出してしまえばいいことではないか、と気付いた。唇を少しだけ開いて、ずっと空気を吸い込む。あとは声帯を振るわせるだけ。しばし私は胸を上下させてしまった。

（…だめだ）

今、私にはこの静寂が破れない。非現実には太刀打ちできるリアリティが自分にはない。寝起きのぼんやりとした体は、自分の存在も薄くしていくみたい。

そうだ。

（私は魚なのかも知れない）

突拍子もない考えが私の中に浮かぶ。私は小さく頷いて、反芻した。この白い壁は実は水槽のガラスの反射で、カーテンは水草。今音があまり聞こえないのは、水中の圧力と水の流れの変化に対応するための準備中だから。本当の私は瑠璃色の魚で、この水槽に仲間は一匹もいない。水草の間を上手く擦り抜けられるか挑戦して、水草を尾びれでなでたりもする。夜は自分で作った空気の泡を上下させて遊び、眠りにつく時はガラスに自分の鱗を映し観て、水の流れに身を任す。

こぼこぼこぼこぼこ

私の耳に残るのは、きつと止まってもなお耳に残る生命維持装置の音。

（なんだか怖い）

私はかぶりを振った。足元から丸まったタオルケットをひきよせる。やわらかい。でも、汗ばんだ肌の感覚が気持ち悪い。

（もう一度眠れないかしら。夢は見なくてもいいから）

私は体を横たえた。はやく光が、声が、私をこの場から引き上げてくれますように。

おやすみ。

（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。
よろしかったら感想等書き込んでいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6769b/>

ロフト幻想

2011年1月26日15時37分発行